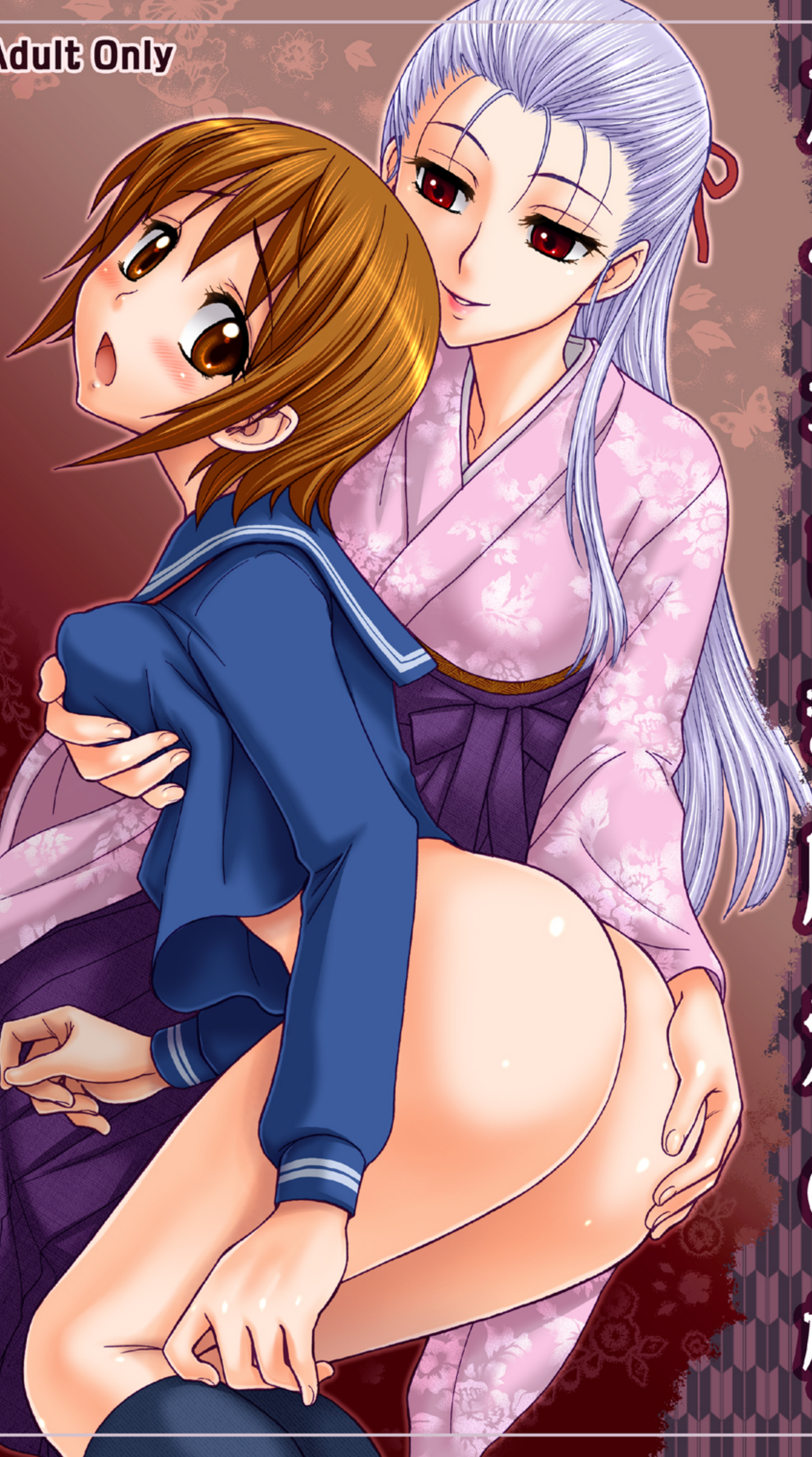


Adult Only

か
ぐ
わ
し
し
き
肛
瀆
の
檻



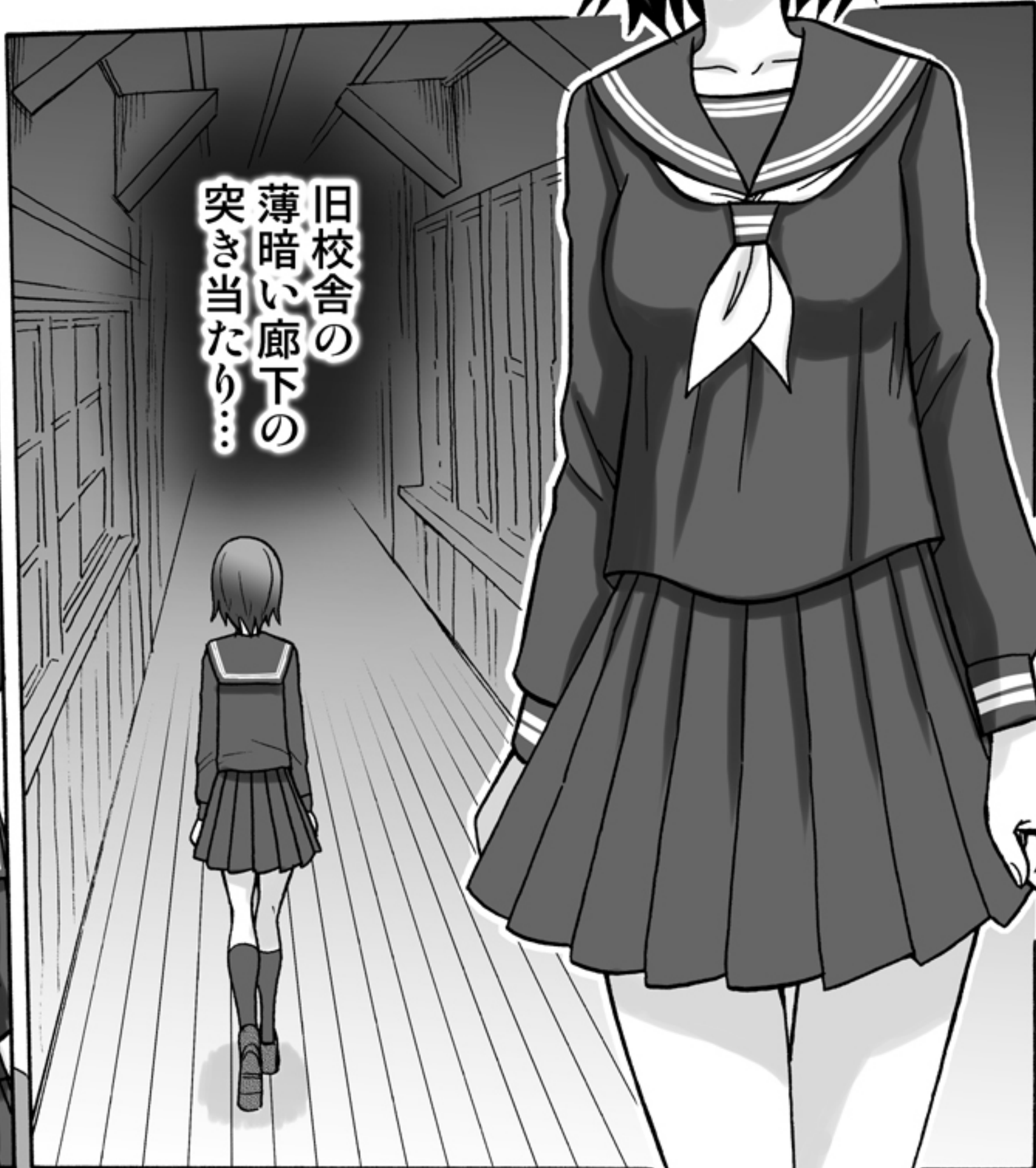




今日もまた
私は
その場所へと
向かう――



今はもうそこに
無いはずの…
私だけにしか
見えない
特別な扉――



旧校舎の
薄暗い廊下の
突き当たり…



いらっしやい
真由さん





…で…でも
あの…私…

じゃあ早速
お願いしよう
かしら

あら…
おかしな子ね

ここまで来て
おいて今さら
遠慮だなんて

笙子さん…

ありがとう…
嬉しいわ
また来てくれて



ゆる



ドキッ

あ…っ

でもそういう
初心なところ
嫌いじゃなくてよ

さあ…
始めましょう
皆も
首を長くして
待ってるわ

彼女に
促されるまま
私はいつものように
和式便器にまたがった

股を大きく広げ
何もかもが
よく見えるように

何度も
繰り返ししてきた
秘密の儀式…

ぞわっ

はあ

笙子さんの瞳が
まばたきもせずに
私を見つめている

はあ

でも…
突き刺さる視線は
彼女のもの
だけじゃない

ビキ

ビキ

ああ…でも…
やっぱり
恥ずかしい…

背中ごしに
聞こえる
熱い息づかい…

狭い個室の壁や天井…
四方八方から
姿のないものたちの
無数の視線が私の股の間を
一斉に注目しているのだ

声にならないささやきが
私が息むのを
今か今かと待ち構えている

出せ…

はやく…
はやく…

ひり出せ…

どうしたの？
遠慮は
いらなくてよ

あ…っ
は…はい

いま…
今すぐ
出します
から

ふう…っく

あつ

まじろ

ん…う

ん…ん…
ん…ん…
ん…ん…

むぐ

むぐ

むぐ

はあ...あ...んあ

ひあ...あ...はあ...あ...あ...

は...ああ...♡
真由さん...
こんなにくさん
太いのを
ひり出して...

いっぱい
溜めこんできて
くれたのね♡
うれしいわ

はあ

はあ

ひや...っ

ひや...っ

だ...ダメっ
ダメです...
笙子さん
また...
そんな...

うふふ...
素敵な脱糞を
見せてくれた
ほんのお礼よ♡

れ

はう...
ん...っく





はあ

はあ

はあ…っん

そ…それは
そうですけど

つくあ…ツ

それに汚れた
お尻のままじゃ
下着も穿けない
でしょう？



ああ…
そんな…

ふふ…真由さんの
ウンチ…とても
美味しくてよ♡

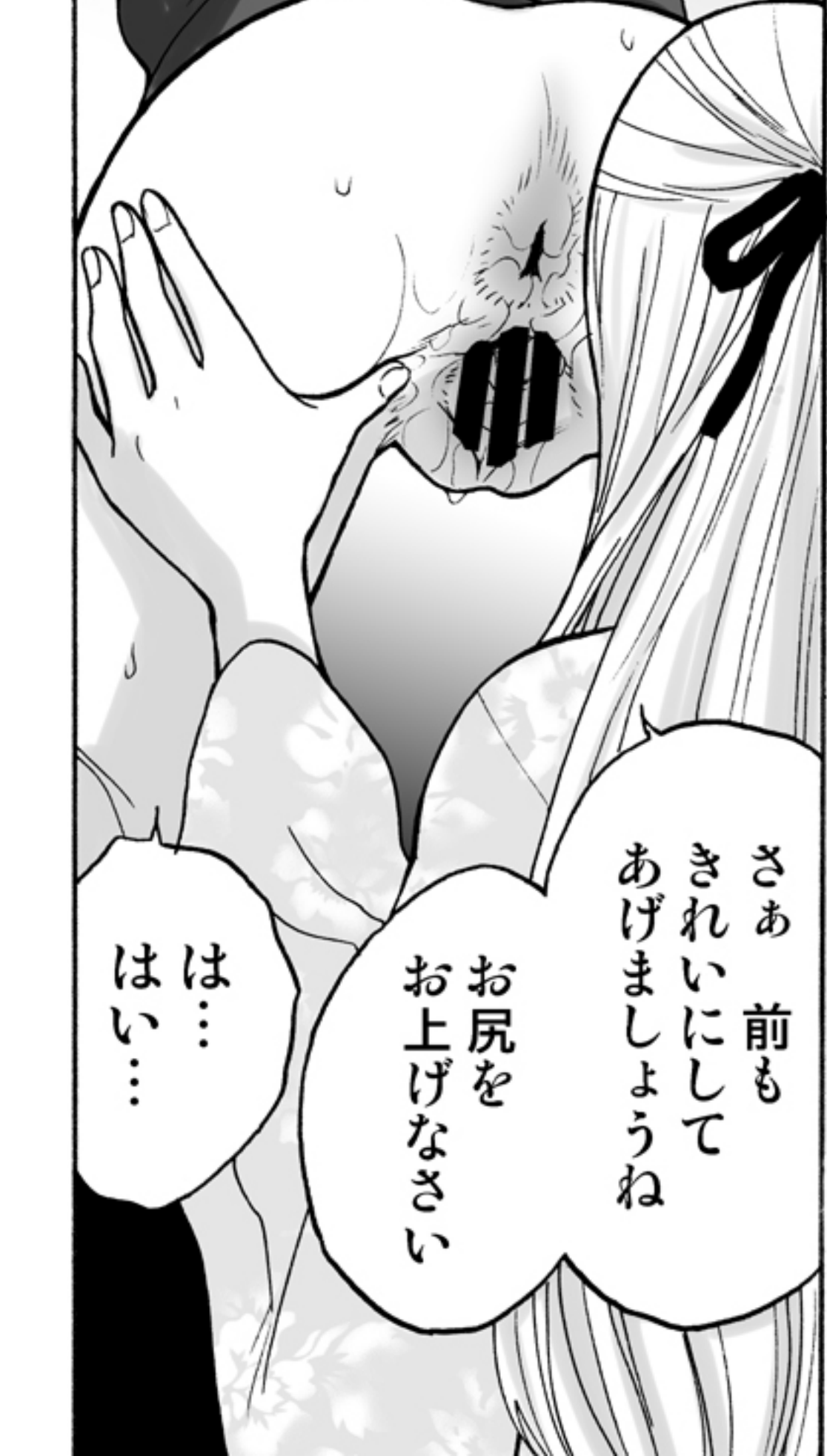


カリ
あはあ…

あ…ああ…
ごめんなさい
笙子さん…
私…ぜんぶ
出し切ったと
思ったのに…

んふ…うむ…♡

モググ
モググ
くちや
くちや



はい…
はい…

お尻を
お上げなさい

さあ 前も
きれいに
あげましょうね



ポクッ

はあ…あ

真由さんったら…
おしっこじゃない
ものを こんなに
お漏らしして…♡

笙子さん…また
あんなことを…

うわっ

興奮してるんだ…
私がウンチ
するとこ見たり
私の股のあいだを
舐めたりして…

か…で…
ち…ち…
う…
♡♡

ん…
あ…

ん…
ん…

ん…
ん…

ん…

ん…

ん…



トイレ



旧校舎の倉庫へ
古い資料を返却しに
行った帰り道

私は不意に
耐えがたい
便意に襲われ…
手近にあった
このトイレに
駆け込んだのだ

はあ

はあ

はあ

とても素敵な
排泄だったわ…
ありがとう
真由さん…♡

皆も私も
心ゆくまで
堪能させて
もらったわ…

このいかがわしい
女子トイレに
私が迷い込むことにな
ったきっかけ

それは今から
ひと月ほど前に
さかのぼる

腰を下ろして
ほっと息をついた
その直後——





やめなさい
お前たちっ！

クハッ

お…
女の…ひと…？

ちゅぽんっ

無辜のものを
無理矢理に
連れ込んだところで
益にはならないと
何度言ったら
分かるのです…！

違う…

何が違う
ものですか
まったく…

無理矢理
違う…

ごめんなさいね…
怖かったでしょう
もう大丈夫よ



あああの…
ここは
いったい…

あ
あなたは…

だ…
ダメ…えっ

あ…ああ
そんな…っ
ほっとしたら
力が
ゆるんで…

ごごめん
なさい…私
人前で
こんな…

っひあ…っ!?

ぶるるる

ちゅ

はあ…あ…あ…

すっ

はあ…っあっ

な…
なにを…

何って…
見てのとおりよ
お尻を拭かなくちや
下着も穿けない
でしょう？

そ そんな
いいです…
じ…自分で
やります
から…っ

怖がらせて
しまった
せめてもの
お詫びよ…
気にしないで



でも
そんな...

はあ...ん
こんなの...
恥ずかし
すぎるよ...

ほら...
きれいに
なったわ

下キ

下キ



—じゃあ
あなたは...

そこに普通の
お手洗いが
あったから
何の気なしに
入っただけだと

は...はいあの...
ちよつと薄暗い
感じはしたけど
旧校舎だし—

古いから
そんな気が
するんだろう
って...

そうだったの...
てつきり皆が
異をしかけて
かどわかったのだと
ばかり思っていたわ

否

否

われらは何も
していない

真由さん...と
言ったかしら

あ...はい

ここはね...
おぞましい禁忌を
犯した罪人たちが
囚われた牢獄なの

あなたは
どうした拍子か...
見えるはずのない
その入口を見つけて
迷い込んで
しまったのよ

この閉ざされた
世界の中で
私たちは…

満たされることのない
妄念の炎に
身を焦がしながら

ずっとずっと
悶え苦しみ続ける
運命なの

この先へ逝くことも
消え去ることも
許されずに…

そそんな…

まさか
私も…

安心なさい

何の罪も犯して
いないあなたに
この空間の制約が
及ぶことはないわ

ちゃんと
帰り道も
教えてあげる

ほホントに…!?

ええ 本当よ
でもその代わりに

ひとつだけ…
お願いを聞いて
もらえないかしら

お願い…?

ときどき…
時々でいいの

ここへ来て
…その…

見せて
ほしいのよ

つまり…
あなたが
排泄…する
姿を—

え…っ

な何を
言ってる…の

もちろん
今日みたいな
怖い目には
決して
会わせないわ

そんな…
だめ…っ

皆の姿も
消させておくし…
手出しどころか
毛ほどだって
触れさせはしない

いやよ…私
そんな—

あなたは
何も気にせず
普段どおり
用を足すだけで
いいの

ただその様子を
ほんのちよつと
見守らせてほしい…
それだけなのよ

お願い…
真由さん

愚かで罪深い
虜囚たちを…
私を…
少しでも
哀れむと思って

ね…どうか…
後生だから…

結局—
彼女の必死さに
押し切られるまま
そのとんでもない申し出を
私は了承した…
せざるを得なかった

笙子…さん…

最初から
選択の余地など
ありはしない…
首を縦に振らなければ
この牢獄から
抜け出すことは
出来ないのだから…

無事に元の世界へ
返されてから
3日後——
散々ためらった末
私はずいぶん
あの異界への扉を
再び訪れた

まあ……！
本当に来て
くれたのね
真由さん……
嬉しいわ♡

だって……
約束だもの

いつまでも
先延ばしに
するわけには
いかなかった

彼女を裏切ったら
後でどんな
怖ろしい目に会うか
分かったものでは
ないのだから

でも……
思っていたより
笙子さんは
ずっと優しくかった

あせらないで
……ゆっくり
ゆっくりで
いいのよ

緊張しきって
排泄どころではない
私を急かすことも
なじることもせず
自分のリズムで
リラックスして
息むのを待って
いてくれるのだ

は……はい
ん……っく……
んふう……う……

だからさっさんさん
時間をかけたくせに
ほんのちよっぴりしか
出なかったことのほうが
逆に恥ずかしくて
情けなくて……

懐紙を切らして
しまったから……と言って
初めて舌で舐め清めて
くれたときも
嫌悪感どころか
笙子さんの
美しい口唇が
私なんかのために
穢れてしまう……

そのことへの
申しわけなさで
いっぱいだった

2、3日に
一度だった訪問が
やがて毎日となり

いつしか私は
笙子さんの前で
たくさん出すため

それ以外の排泄を
できるだけ
控えるようにさえ
なっていた

カチャ..

また明日ね
笙子さん……

じゃあ……
そろそろ私
帰るから……

な…
なん…で…

うきき

き

きき



笙子…さん…
どうして…？

ごめんなさいね
真由さん…
ままごと遊びは
もうおしまい

元の世界に
帰してあげる
気なんて
最初っから
さらさら
無かったの

ひ…ひどい
そんな…っ

私…
信じて
たのに…

ふ…っ
おバカさんね

この世ならざる
人でなしの
物の怪との約束を
信じたりするなんて

怨むなら
おひとよしすぎる
自分を
怨みなさい…

ちがうよ…
そんなんじゃない…

ギッ

む…

笙子さんこそ…
どうして私を信じて
くれないの…？

ずっとここに
いてほしいって…
ひとこと言って
くれば私は

それなのに
ひどいよ…こんな
力づくで縛りつける
なんて

そんな…
真由…じゃあ
あなたは…

そうだよ…
私だって
ここの皆と…
笙子と同じなの

笙子…？
もしかして
それは

人前で
ウンチして
お尻の穴を
舐められて…
あんなにも
感じちゃった
んだもの…♡

そう…
さつき真由が
たっぷり
ひり出してくれた
ウンチよ♡

いけない子ね…
自分から望んで
人の道を外れる
だなんて…♡

みんち



あなたが
帰ったあと

いつもこうして
ひとり慰めてたの

真由のウランチに…
たおやかで
かぐわしい香りに
包み込まれながら…

大丈夫よ…
何も怖いこと
なんてないわ♡

はむ…っ
ん…うふ

うふふ…
いかがかしら 真由
はじめて味わう
禁断の果実の味は…♡

あ…はあ…あ
わたし…
食べちゃった…♡
自分のウランチ…

そうよ…♡
この媚薬をひとたび
口にしたらが最後
もう後戻りは
できないの…

でゅゅ…
しゅゅ…

あ…ああ…
笙子…
わ私…っ

ゴクンッ



そして私は
ウンチが塗りたくられた
笹子のおチンチンに
処女を捧げたのだった

あ……あ

あ……あ

笹子の裸身が
絡みついたたび
私の全身にもウンチが
塗り拡げられてゆく

まさか 初体験を
こんなかたちで
迎えるなんて

でも……
甘臭い芳香の中で
私は 気が遠く
なりそうな昂ぶりを
確かに感じていた

ドクッ

ドクッ

ドクッ

真由が想像したこと
もないような快楽を
これからひとつひとつ
教えてあげる
そう……私たちには
時間ならいくらでも
あるもの……♡

嬉しい♡
いっぱい……
いっぱい教えてね
笹子……♡

あむ…つぷ…んふう…
笹子のウンチ…すごく美味しいの
もっともっと食べさせて…♡



はあ…あん♡
真由ったら
すっかりウンチに
夢中になって…
私の味がよほど
お気に召したのね

好きなだけ
お食べなさい…
いくらでも
ひり出して
あげるわ…♡



ここへ来てから
どれくらいの日日か
経ったのだろう…
笹子の子種を孕んで
膨れてゆく下腹が
過ぎした日々の長さを
物語っている

時間の感覚のない
永遠の牢獄の中で
私たちは
どこまでも深く
肉欲の海の底へと
堕ちてゆくのだった

